

地方だより

氷島 T-3

昔、北氷洋には神秘な島がいくつかあった。

探検隊が海氷上から突出した巨大な氷を被った島を発見し、後にその場所に行ってみると見あたらないという話がそれである。これらの消えうせた島は、今日では氷島であったと推定されている。

氷島が問題になりだしたのは1950年頃からで戦後1946年8月14日アラスカ沖合約500kmの北氷洋上でアメリカ空軍の飛行機搭載レーダーに異様な像が現われてからに始まる。巨大な漂流している氷塊には岩石、砂泥、それに草の根もあり、純白なパックアイスとも異にし、夏には一面にうすよごれ、その大きさも、ざつと佐渡ヶ島ほどで、厚さも50~60mに達するものがある。



写真1.

両氏がT-3に行き、兵隊と共にクリスマスを楽しく過ごしたことであろう。

写真はT-3の外周、観測室内外の模様を示したもので、補助教授により提供されたものである。本紙を借り厚くお礼申しあげたい。

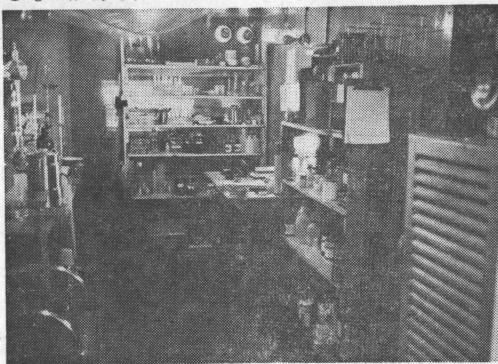


写真2.

最初に発見された氷島はTarget Xと命名され、相次いで氷島が発見されるに至り改名されT-1, T-2, T-3と名付けられてきた。こゝでいうT-3はその一つで1950年7月29日にアラスカ沖合の75°24'N, 173°00'Eの地点に発見されたものである。1952年3月にアメリカ空軍のJ.O. Fletcher以下が最初に着陸し、以来観測基地として、海洋、海底、気象、重力、地磁気等の観測が行われ、貴重な資料を提供しつつある。

このT-3に、北大の中谷教授指導のもとに低温科学研究所の楠宏助教授、六車二郎助手が観測の協力におもむき幾多の貴重な成果をあげられた。本年も、六車、菊地



写真3.

写真1. 夏のキヤンプ地 (1959年夏)

トレイラーと称する2.5×10mの箱型の家屋を居住用・実験用・食堂などに用いている。基地周辺は油やゴミで夏の間融解が激しく、建物の腰廻りに古いパラシユートの布を使ったが夏の終りには高さ3mもの氷の山が残る有様。この夏は氷が平均120cm融けた。夏の間の補給は空中投下による。(六車二郎氏撮影)

写真2. 実験室

トレイラー内に設けた実験室の一部。海水分析を行なった。この他気象室、地球物理(重力、地磁気)なども

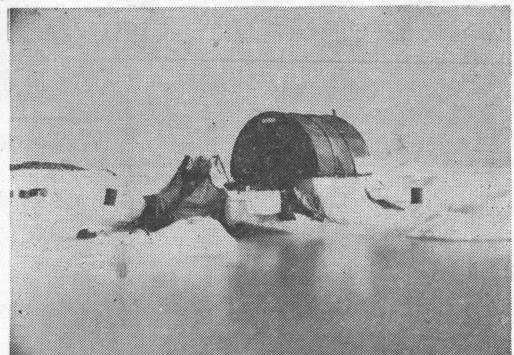


写真4.

同じ型のトレイラーを用いる。写真の実験室は1957~58年(IGY)には電離層用に用いた。

写真3. 輻射測定

Eppley, Beckman, Whirleyなどの輻射測定器。手前のボンベはヘリウム(パイバル用)(但し1960年には水素発生器をもちこんで1日2回ゾンデをあげた)。氷島は漂流しているので方位が変り、風向など正確な値を求めるのはむずかしい。とくに夏は曇った日が多く、こんな時に1日に30度も島が廻転することがあるのでこまる。

写真4. 海氷上の海洋観測小屋

夏の終りには小屋の廻りには深さ2mのバドルができる(海氷の厚さは6mくらい)。小屋も2m近くの小山の上に取り残された。左手遠くはゴミ捨て場。この近くに水中音波、人工地震(水深や氷島の屈折波探査)のための小屋もある。